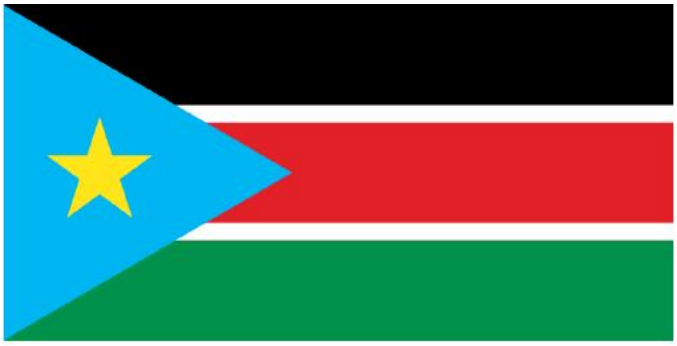
南スーダン

【国名】

●スーダンは古代エジプト語で「黒い人の国」を意味する。南部スーダンが独立して南スーダンとなった。



【国旗】

●現在の国旗は、南スーダンが独立前の南部スーダンだった時代に制定された。スーダン人民解放軍（SPLM）の旗のデザインをそのまま利用している。

●黒は南スーダンの民（黒人）、白は平和、赤は自由のために流された血、 緑は国土、青はナイル川の水、金色（黄色）の星はベツレヘムの星で南スーダンの団結を象徴している。

【歴史】

●スーダンでは独立前年の1955年から南北内戦が始まった。二度にわたる内戦は計39年に及んだが、スーダンと結んだ2005年の包括的和平合意（CPA）によって世界最長の内戦に終止符が打たれた。

●2024年10月現在、2011年の住民投票で独立を選んだ南スーダンは、アフリカで最も新しい独立国であり、193番目の国連加盟国である。面積は約64万㎢であり、日本の1.7倍の国土を持つ。

【人口】

●人口は約1、501万人。そのうち約240万人が難民に、約230万人が国内避難民になっており、人口の約3分の1が住む場所を失っている。

【宗教】

●国民のほとんどが土着宗教の混じったキリスト教を信仰している。キリスト教は、内戦時代を通じて国民の心に寄り添い、政府の代わりに住民に教育、医療等の社会サービスを提供してきた。このため国民の教会に対する信頼は厚い。毎週日曜日には、500万から600万人もの数の人々が教会に通うと言われ、教会の持つ影響力は非常に大きい。

【住居】

●伝統的な住居はトゥクル（Tukul）と言われ、円形状の土壁に藁葺屋根が特徴。

【言語】

●南スーダン人は、それぞれ、出身部族の言語が一番堪能であるが、歴史的にスーダンの一部であったことから、多くの南スーダン人はジュバ・アラビックと呼ばれるアラビア語方言を流暢に話す。他方、ジュバなどの都市部では多くの人が英語（公用語）を話している。現在学校教育は英語で行われている。

【自然環境】

●南スーダンのナイル川流域には、スッド（Sudd）と呼ばれる広大な湿地帯が広がっている。スッドは、世界最大級の大きさの湿地帯であり、乾季には約3万㎢の広さしかないが、雨季には約13万㎢まで拡大する。かつてスッドには多くの野生動物が棲息していたと言われているが、現在ではほとんど見られない。

●バディンギロ・ボマ国立公園では、600万匹のアンテロープに代表される世界最大規模の陸上ほ乳類の大移動が確認されている。

【スポーツ】

●南スーダンは64の部族があると言われているが、ディンカ族など伝統的に高身長の部族もあり、バスケットボールは人気のスポーツ。初出場となった2024年のパリオリンピック直前の強化試合では、ランキング1位のアメリカ代表を1点差まで追い詰める快挙を遂げた。

、日本においても、プロバスケットボールリーグ（B3リーグ）東京ユナイテッドBCでアンジェロ・チョル(Angelo Chol)選手が活躍中。

●2020年東京オリンピックでは、前橋市が南スーダン選手団のホストタウンとなった。選手団の一人であるアブラハム・グエム(Abraham Guem)選手は五輪後も日本で練習を続け、2024年パリオリンピックに出場。前橋市は、南スーダン青年スポーツ省と覚書を締結してスポーツ交流を継続し、2023年には2名のサッカー選手を地元Jリーグクラブで5ヶ月間受け入れた。

●2012年のロンドンオリンピックで、南スーダン難民のグオル・マリアル（Guor Marial）選手がマラソンの種目で出場。当時、同選手はアメリカ在住であったが、アメリカ国籍を取得していなかったためアメリカ所属の選手として出場できず、スーダン代表としての参加を打診されたが固辞。周囲の支援で独立参加選手団の一員として出場を果たした（結果は47位）。

（了）